

## 特別展「浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術」開催に向けて

守安 収

「参った、参った」、これがここ数か月ほどの口癖でした。浦上玉堂父子展の準備と図録執筆にほとほと疲れました。自業自得とはこのこと。なぜか何とかなる、35年超の学芸員生活で間に合わなかったことはないという感覚でいたのが大間違い。老化のせいもありますが、劣化という方が正解です。管理の悪い文化財(例えて申し訳ない)みたいなものです。いつも若い人たちには、文化財は老人、病人と思って大切に扱うようにと指導していますが、私自身がそうであるなら、守安を大事にしないと言っているのと同じでは…。そうならばシメシメなのですが、あいにく館内では誰も聞いてくれそうな気がしません。忙しいのだから猫の手ならぬ豚の?を借りて、くらいの感じでしょう。▼こんなに「参った」のは大学の卒業論文以来です。当時は万年筆での提出でした。400字詰め原稿用紙に書き損じたらやり直し。砂消しゴムとかナイフでうまく削れたら嬉しかった記憶がいまだに残っています。最近消せるボールペンが出現し、時々使いますが、パソコンがなかった時代、せめてそんな筆記具があったらよかったのにと恨み言をいいたくなります。ここで裏情報。このボールペンで紙に書いて冷蔵庫に入れたら、消したはずの文字が復元します。南極や北極では使用できませんよ。▼浦上父子展は2階全部、国吉康雄展は地下1階全部と、9月23日からは2つの展覧会を同時に開きます。世界に通用する岡山出身の画家が築きあげた芸術世界を存分にお楽しみください。NHK日曜美術館(10月9日放映)で紹介される浦上父子展のチケットで国吉展は無料です。お得感ありますよ。



 岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://www.pref.okayama.jp/scikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

## 編集後記

大山真季

美術館ニュース114号をお届けします。今年の秋は2本の展覧会が同時スタートのため、8月まで開催していた「伊達政宗と仙台藩」展が終わると、館内では慌ただしく次の展覧会の準備が始まりました。気付けばもう、秋らしい涼しい季節。当館では今年の夏頃から、お客様に展示室で快適な時間をお過ごし頂くため、ショールの貸出を始めました。展示室内は作品保護に準じた環境にしている関係で低めの温度設定となっておりますので、ご鑑賞中に寒さを感じた時には展示室受付までお気軽にお声がけ下さい。



「美術館の紹介」vol.14

2階ホール前ロビーにあるスタンドライトのシェードは、ステンレス板を3枚組み合わせ切り紙細工のように加工することで三角形から五角形へと拡張させた形状である。板の隙間を設けることによって、光の流れを生み出し、軽やかさを感じるデザインとなっている。

## 浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術

守安 収(館長)

浦上玉堂(1745-1820)は江戸時代後期の音楽家であり、詩人であり、書家であり、そして何よりもすぐれて独創的な水墨画家でした。これはちょうど10年前にわれわれ岡山県立美術館と千葉市美術館とで開催した「浦上玉堂」展の図録ご挨拶の冒頭部分です。あれから10年を経て、魅力的な玉堂作品を新たにいくつも見出すことができたこともあり、この度は玉堂の長男春琴(1779-1846)と次男秋琴(1785-1871)の作品もあわせて展観に供し、彼ら父子の芸術を紹介したいと両館で考えた次第です。玉堂が脱藩を企て16歳と10歳の二人の息子を伴って岡山を出奔したのは50歳の時でした。以来、父子には三人三様、それぞれの人生がありました。しかし、共通するのは「文人として生きる」という姿勢でした。

玉堂は遅咲きの作家です。自ら七絃琴の琴士であり、画の描き方を知らないのだから画家と呼ばれるのは恥ずかしいと語っていますが、40歳ごろから本格的に画に取り組みようになり、山水だけをテーマに制作活動を展開しました。模索の時代を経て、彼が画風を確立するのは60歳代の半ば近くになってのことです。奔放に湿潤な筆を揮った時代があり、さらに年齢を重ねるにつれ渴筆、擦筆、焦墨と独特の筆墨法を駆使して心の微かな動きを山水の画面に投影させた繊細な作品を描くようになり、完成度は一段と高まります。彼は人におもねることなく、形にとらわれることなく、作為を排して自由に表現します。心をそのまま写す「写意」こそ文人画の本意であり、玉堂ほどこの精神を画布の上に率直に描き出した画家は他に例をみないと思われます。彼が描く心象風景の美しさこそ他の画家に求めても求められない美しさであり、そこに玉堂画最大の魅力が見出されるのではないのでしょうか。彼は晩年、京都で春琴家族と同居して琴詩書画に親しむ文人生活を送り、76歳で亡くなりましたが、前年までは元気で作画に励んでいたことが判明しています。没後に建てられた『玉堂琴士之碑』には「玉堂は琴をひき、山水を写す。また春琴は画を善くし、秋琴は音を解する」といった趣旨の頼山陽による文章が刻まれています。

長男春琴が在世時、父をはるかに凌ぐ人気作家であったことはよく知られたところですが、彼の温和で洗練され気品さえ漂う山水画や花鳥画は父とはまったく別種のものでした。ところが、現在では独創的な玉堂に対して通俗的な春琴というように逆転した評価がなされています。玉堂が春琴のことを「行燈絵かき」とか「針箱絵」と辛辣に評したということも伝えられていますが、実態は仲の良い親子で揃って文人仲間たちとの交際を楽しんでいました。逆転評価の要因としては、春琴の人氣があまりに高かったためにきわめて多くの贋作が出回ったこと、これまで春琴作品をまとめてご覧いただく機会がほとんどなかったために真価を理解するまでに至らなかったことが大きいと考えています。彼は若い時から熱心に中国画を学んで自家薬籠中のものとし、その一方で写生に励んでそれを品よく組み合わせ構成する才能を発揮しました。『古画備考』には、19世紀前半の京都では円山応挙の画系が繁栄する一方で、マンネリズムに陥ったこと、それに代わるものとして文人画が擡頭してきましたが、その旗頭が春



浦上玉堂 《暖霞曉嶺図》個人蔵

琴であったと記述されています。彼の画風が当時の人々の趣味・趣向に適い、年間5、60点余の作品を精力的に描いていたのです。本展を通じて、その磨き上げられた文人感覚を生活の中に活かしつつ制作に勤しんだ春琴の本領、美点を改めて認識いただけたら幸いです。

また、11歳から会津藩に音楽方として仕え、雅楽方頭取等を歴任して70余年を会津の地で暮らした秋琴は、幕末の会津戦争後、85歳で岡山へ帰ります。彼は父や兄と比べて地味な存在ですが、70歳での隠居後は画筆を執る機会が増えて亡くなる直前まで筆を揮いました。いかにも地方文人らしい素直で伸びやかな山水をみると、まさに自娛の作であることを実感いたします。浦上父子は三人それぞれに文人として生きたのです。

岡山展においては、およそ260点にのぼる父子の作品を公開いたします。世界中で高く評されている玉堂の作品は希少で個人蔵のものがほとんどであり、まとまって鑑賞することが困難な作家です。初公開作品が随分と揃っています。そして近代になって玉堂に当てられた強い光の陰に隠れてしまい、存在そのものが忘れ去られてしまったかのようにみえる画家春琴の実像とその魅力を知っていただけたらと願う次第です。彼は多方面に才腕を示し、文人意識を持ってすべてのことに向き合った人であり、洗練された都会人でありました。また秋琴は、幼い頃から兄に匹敵する画才をみせていたものの、音楽を以て会津藩に仕えたために筆を執る機会が失われてしまったようですが、晩年に至って再び筆を執ります。その闊達で楽しい作品の多くは会津地方と岡山の二つの故郷に伝わっています。

三人三様の文人模様がこの大規模な展覧会から見えてくると思います。この機会にぜひどうぞお出かけください。



浦上春琴 《瓶花図》1839年 個人蔵



浦上秋琴 《寒窓清興図》1867年 一般財団法人 倉敷山田コレクション

特別展「浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術」

会期：2016年9月23日(金)-10月30日(日)

〔前期〕9月23日(金)-10月10日(月・祝)／〔後期〕10月12日(水)-10月30日(日)

会場：2階展示室

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

観覧料：一般1200円、65歳以上1000円、大学生700円、小中高生300円

※本展2回日来館以降、半券提示で観覧料半額

◎当館での会期終了後、千葉市美術館に巡回[会期：2016年11月10日(木)-12月18日(日)]

## 国吉康雄—日本とアメリカ 岡山のコレクションから

廣瀬 就久(学芸員)



国吉康雄《祭り終わった》1947年

国吉康雄(1889-1953)は岡山市に生まれ、1906年に移民としてアメリカに渡りました。翌年から美術に関心をもち、1920年代からアメリカの画壇に注目されます。社会の周辺に生きる女性や、自らの心情を投影したかのような風景や静物など、独自の作品を制作します。1931年から32年に一度帰国したものの、太平洋戦争中はアメリカで過ごし、その後現地で死去しました。抽象表現主義が台頭する前夜のアメリカ画壇で、高い評価を得ました。

当館では国吉康雄の作品を、随時「岡山の美術」展で紹介しています。1990年には特別展『国吉康雄展』を開催しました。そして2003年5月には、福武總一郎氏から、国吉康雄の一大コレクションである「福武コレクション」のご寄託をいただいています。当館では2006年に、このコレクションを生かした特別展である『国吉康雄展』を行いました。

昨年には、ワシントンD.C.のスミソニアン・アメリカ美術館が、“The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi”(国吉康雄の画業)と題する、アメリカでの久々の個展を開きました。福武コレクション多数と、当館所蔵品《祭り終わった》が出品されました。国吉の画業が再評価されています。

公益財団法人福武財団と公益財団法人福武教育文化振興財団は、これまで国吉康雄に関する教育普及活動に努めています。昨年10月より岡山大学大学院教育学研究科において、寄附講座「国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座」を開設しました。

今回の特別展示では、この講座の協力を得ながら、スミソニアンでの国吉展の報告を行います。そして20世紀の具象アメリカ美術を数多く所蔵されている、福島県立美術館の荒木康子氏による講演会や、当館学芸員による展示解説、そしてボランティアによるギャラリートークなど、国吉をわかりやすく伝える行事を準備しています。

当館所蔵品、福武コレクションのほか、岡山県内で所蔵される約140点の作品を展覧し、「子ども」「風景」「女性」「静物」「日本への想い」「サラ夫人と仲間の画家」「仮面」という章立てから、国吉の画業に迫ります。

岡山の美術展 特別企画「国吉康雄—日本とアメリカ 岡山のコレクションから」

会期：2016年9月23日(水)-11月6日(日)

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日) 会場：地下展示室

## 県美コレクション活用BOX 日本画編—この国の価値観の発見—

岡本裕子(主任学芸員)

平成27年度末、「県美コレクション活用BOX／日本画編—この国の価値観の発見—」(以下、BOX)が完成しました。制作のきっかけとなったのは、美術館のアクセシビリティを高めるための教育素材の制作や、森山知己氏(日本画家)を講師に迎えて実施しているワークショップ「この国の価値観・再発見」(参考：美術館NEWS 102号掲載)、視覚に障がいがある方との出会いとなった「岡山県立岡山盲学校高等部の美術館鑑賞学習」の3つの事業です。制作にあたり、伝統的な素材や技法にこだわって創作活動やワークショップをしている森山氏、そして、間伐材となる針葉樹を用いて作品を使う人への優しい眼差しを大切に制作をしている南川茂樹氏(岡山県立大学デザイン学部准教授)に、企画・監修をお願いしました。

「そもそも“日本画”って何？」という疑問に、鑑賞者が自ら考え、気づくことが可能となるコンテンツを森山氏と検討し、<この国の絵画を成り立たせている素材><この国の価値を再考することを促すツール><県美コレクションをみることを促すツール><表装・表具への理解を支援するツール>を制作・収納することとしました。

収納するケースは、それぞれのコンテンツがフレキシブルに活用できるよう、そして岡山県産の間伐材を利用して軽量化を図るなど、南川氏ならではの作品として制作を依頼しました。

このBOXは、「岡山の美術第5期」(会期：2016年11月5日-12月11日)日本画コーナーの展示にあわせてデビューする予定です。様々な場面で、BOXに収容している目に見える形・手に取ることができる形であるコンテンツを活用することで、この国の価値観を考える手がかりを、障がいの有無にかかわらず多くの人に提示し、ともに考えていくことができればと思っています。

### 県美コレクション活用BOX 内容物一覧

この国の絵画を成り立たせている素材		この国の価値を再考することができるツール			
材料	紙	麻紙(高知麻紙・雲肌麻紙)、薄美濃紙、鳥の子紙、画仙紙	道具の必然性(支持体と墨・筆の関係／人の身体との関係)	板に描く、	
	紙の原料	雁皮、三桧、楮		絹に描く(粗い・密)、紙に描く	
	絹	粗い、密(現代)	材料と水との関係性／この国の価値から生まれた表現技法	滲み、澆墨、たらし込み、	
	膠	三千本、経師用膠		裏彩色、岩絵の具の粒子	
	絵の具	天然岩絵の具(辰砂・緑青・群青)、水絵の具(本洋紅・本藍・藤黄)			
	鉱石	孔雀石、アズライト(藍銅鉱)	表装への理解を助けるツール		
	胡粉	水干胡粉	卷子	作者不詳《桃太郎絵巻》	実物大複製画
箔	金箔、銀箔、青金	帖	浦上春琴《山水図(春琴帖)》	実物大複製画	
道具	筆	長流、彩色筆、則妙、面相、連筆・かたば連筆	掛幅	足利義持《寒山図》	ミニチュア(1/2)
	刷毛	3寸刷毛	屏風	高橋秋華《海金剛図屏風》	ミニチュア(1/5)
	硯	赤間の硯、硯砥石	県美コレクションをみることを促すツール		
	墨	油煙墨、松煙墨	稲葉春生《老椿黒猫》の制作過程ツール		
	絵皿	丸皿、梅皿	<input type="checkbox"/> 実物大部分で4行程を紹介(紙本3工程／絹本1工程)		
	その他の道具	膠鍋、砂子筒、箔はさみ	<input type="checkbox"/> A4サイズの高精細図版		



収納ケース(W120×D61.5×H80cm)



天然岩絵の具・鉱石・水絵の具



材料と水との関係性／この国の価値から生まれた表現

## 新収蔵品紹介

### File 08

保元合戦図屏風  
中村 麻里子(主任学芸員)



作者不詳《保元合戦図屏風》上より、右隻・左隻

今回は平成27年度に岡山市在住の個人より当館に寄贈された《保元合戦図屏風》について紹介する。

いわゆる「源平合戦図屏風」には、「一ノ谷」や「屋島」といった『平家物語』を絵画化したものが多いが、『保元物語』『平治物語』を題材にした作品は格段に少ない。両者を右隻・左隻のペアで構成した作品は、メトロポリタン美術館本・仁和寺本など複数伝わるものの、本図のように『保元物語』の一部の場面のみを六曲一双屏風に仕上げた作品は稀少である。

『保元物語』とは、保元元(1156)年、崇徳上皇と後白河天皇の皇位をめぐる紛争に、関白藤原忠通とその弟左大臣頼長の摂関家覇権争いが結びつき、これらの両派に源平両氏の武士たちが動員され、鳥羽上皇の死をきっかけに起こった「保元の乱」に取材した合戦物語である。崇徳上皇と後白河天皇、藤原忠通と頼長はともに兄弟であり、源為義・為朝親子と義朝は親兄弟、平忠正と清盛とは叔父・甥がそれぞれ敵味方に分かれて戦うという悲惨な事件であった。戦闘そのものは7月11日の午前4時から8時までの4時間という短時間で決着がついたが、政治的・社会的にも大きな影響を及ぼし、武士の中央政治への新出という歴史上の転換点ともなった。

本作品は『保元物語』中巻冒頭の「白河殿へ義朝夜討に寄せらるる事」から「白河殿攻め落とす事」の後半途中までが描かれている。源義朝が崇徳上皇方の白河殿に夜討で攻め寄せ、為義・為朝の防衛に苦戦した後、「白河殿攻め落とす事」の最終段階にて白河殿に火を放ち、後白河天皇側の勝利へと転換していく。本屏風には放火を示す炎や煙の表現が認められないことから、それ以前の場面を描いたものと考えられる。強弓の源為朝の活躍シーンが繰り返し描かれ、悲劇のヒーロー為朝を賞賛する内容となっている。

まず右隻第1・2扇中央では、戦闘の始まり、5・6扇で為朝が左大臣藤原頼長に夜討を進言するが却下される場面、その下部に為義の子らが我こそ先陣と話合う場面、3・4扇下部に為朝に射られる伊藤景綱の子五六と、為朝に射られて馬から落ち、弓にひっかかって宙づりになる山田惟行。左隻第4扇には金子十郎家忠に首を取られる高間兄弟の凄惨な場面や、5扇に大庭景清・景親兄弟のドラマ、1～3扇下部に鎌田正清を追いかける為朝など、各場面を散りばめて配置している。

本屏風は江戸時代初期頃の作で、作者は狩野派もしくは又兵衛派周辺と想定される。さらに検討し明らかにしていきたい。

本屏風は、2017年2月1日(水)-3月12日(日)の期間、「岡山の美術展 第7期」にて初めて公開する。また平成28年秋に刊行予定の『岡山県立美術館紀要6号』にて、詳しく紹介したい。

## 展覧会スケジュール

9月  
September

9月7日|水|—9月18日|日|  
第67回岡山県美術展覧会

10月  
October

9月23日|金|—10月30日|日|  
【特別展】  
浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術

日本文人画壇の巨星浦上玉堂(1745-1820)は、現在当館が建つ地に生まれ、備中鴨方藩のエリート武士として前半生を過ごしました。50歳で脱藩、安定した生活を捨てて自由を入手し、琴士・詩人・書家・画人として独自の芸術を開花させます。脱藩に同行した息子2人のうち、春琴(1779-1846)は山水や花鳥の名手として人気を集め、秋琴(1785-1871)は11歳から会津藩に音楽を以て仕える傍ら画筆を執りました。本展は3人の珠玉の作品群が一望できる貴重な機会です。

9月23日|金|—11月6日|日|  
【岡山の美術展】  
国吉康雄—日本とアメリカ

11月  
November

11月5日|土|—12月11日|日|  
【岡山の美術展】  
第6回I氏賞受賞作家展  
伊勢崎晃一郎・隠崎麗奈  
北川太郎・光延由香利

12月  
December

11月17日|木|—12月4日|日|  
第63回日本伝統工芸展岡山展

12月16日|金|—2017年1月29日|日|  
【岡山の美術展】  
瀬本容子展  
美しき金地テンペラ画の世界

9月24日|土| 13:30～15:00

記念講演会 「経営学者・父ピーターF・ドラッカーが愛した日本と日本美術」  
語り手 セシリーA・ドラッカー(ドラッカー氏次女)  
聞き手 松尾知子(千葉市美術館学芸係長)、通訳付  
会場 2階ホール(申込制100名) ※要整理券

9月25日|日| 13:30～16:00

シンポジウム 「文人—中国、日本、玉堂父子の例から考える」  
パネリスト 板倉聖哲(東京大学大学院教授)  
高橋博巳(金城学院大学名誉教授)  
松尾知子(千葉市美術館学芸係長)  
コーディネーター 守安収(当館館長)  
会場 2階ホール(先着180名) ※要観覧券(半券可)

10月16日|日| 14:00～15:30

記念講演会  
「国吉康雄と福島県立美術館コレクション」  
講師 荒木康子(福島県立美術館 専門学芸員)  
会場 2階ホール(先着200名) ※無料

展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>